

## Focus 03

# ダイバーシティで カンボジアの農業解決に挑む

ジェンダーサミットの主要セッション「アジアにおける深刻な問題への女性の貢献」では、食糧不足や貧困など開発途上国の課題解決に挑む女性研究者にスポットを当てる。この企画メンバーである名古屋大学農学国際教育協力研究センターの伊藤香純教授は、カンボジアの農村での国際協力研究の経験から、ジェンダーや多様な視点を持った研究分野のダイバーシティがグローバルな課題の解決に欠かせないと考えている。

### カンボジアの実情調査から始める

1970年から20年余り続いた内戦は、カンボジアの社会や経済基盤を破壊し、多くの人命を奪い、今もなお国の発展を妨げている。特に農家の貧困対策は、カンボジア政府も重要政策に位置づける大きな課題だ。

ポル・ポト政権下で知識人や教育者が虐殺された影響で、農学の研究や農業指導に関わる人材不足は極めて深刻だ。名古屋大学農学国際教育協力研究センターの伊藤香純教授は、カンボジア王立農業大学の教育カリキュラムの改革に協力した背景をこう語る。

「自分の国の農業の実情を知っている人や農業技術を教えられる人がいないのです。教壇に立つのは亡命や留学の機会があって外国で学位を取得した裕福な人たちで、カンボジアで農業を勉強した経験がなく、授業で使うのは外国の教科書です。学生も上流階級の出身なので、農業や農村を知りません。そもそも何が問題で、これから何を解決すべきかを考えることができない状況でした」。

伊藤さんたちは、王立農業大学の教員や学生と一緒に農村へ出向き、農家での聞き取り調査から始めた。まず自国の農業の現状をしっかりと把握して問題点を抽出し、実践的な農学研究と、課題解決の先頭に立つ人材の育成を進めることで、豊かな国づくりの礎となる農業の発展をめざしている。

### ダイバーシティの視点が 気づかせてくれる

国際協力研究を通じて伊藤さんが実感しているのは、ダイバーシティの視点の大切さだ。「貧困の問題をとっても、その原因は多様で、1つの専門分野だけでは見極められません。貧しい農家は米も野菜も作れば、魚も獲りま

す。木も切れれば、豚も飼って、そのすべてがうまく回らないと、収入が下がってしまうのです。時間や予算の制限があっても、性別、研究分野など、さまざまなバックグラウンドを持つ人と一緒に現場に入ることが重要です。多面的な視点によって、自分が今まで気づかなかったことや、見てもいなかったことがわかり、初めてその問題の原因を見いだすことができます」。

伊藤さん自身、博士号は農学で取得したが、修士号は国際関係学、大学では米国に留学し地理学を学んだ。1つの学問領域を突き詰めることよりも、社会に深く複雑に根を下ろす問題の解決に貢献できる研究者をめざしてきた。

そのためにも、特に現地住民の課題やニーズをつかむことに力を入れてきた。

「国際協力では、よい技術や製品があるから使ってもらおうという、協力する先進国側の視点で進められることがあります。しかし、現地の課題を見極め、環境、文化、社会状況を考慮した農業技術を開発しなければ、受け入れられないでしょう。企業の商品開発では、消費者が何を求めているかをしっかりと探ります。研究も同じです。現実の社会で本当に役立つ支援や協力をするには、技術志向よりも、受け入れ側の視点を出発点としたアプローチが必要です」。



**伊藤 香純 (いとう かすみ)**  
名古屋大学 農学国際教育協力研究センター  
プロジェクト開発研究領域 准教授

1997年米国ユタ大学地理学部卒業、2000年桜美林大学大学院国際学研究科博士前期課程修了、04年名古屋大学大学院生命農学研究科博士後期課程修了。農学博士。05年国際協力機構(JICA)カンボジア事務所在外専門調整員などを経て、07年名古屋大学農学国際教育協力研究センター研究機関研究員、08年より現職。15年より地球規模課題対応国際科学技術協力プログラム(SATREPS)生物資源領域「ベトナム、カンボジア、タイにおけるキャッサバの侵入病害虫対策に基づく持続的生産システムの開発と普及」グループリーダー。

### 衛生状況や品質を管理する研修で 米焼酎の拡販に成功

カンボジアのみならず、アジアの途上国の多くは農業就業者の人口比率が高いが、GDP全体に占める農業の比率は低く、農業の生産性向上が共通の課題になっている。

「農家の収入が低いのは、生産量が少ないためだけではありません。生産量があっても、安く買いたたかれてしまうこともあります。生産物をいかに多くのお金に換えていくか。より市場価値の高い農産物を作ることや、加工によって付加価値を高める必要があります」。

カンボジアの農家では昔から米焼酎が作られてきた。農村では今も冠婚葬祭や宴席に欠かせないが、内戦中に伝統的な製法が失われてしまった。アルコール度数を上げるためにメタノールを混ぜた粗悪品が売られることがある。「労働者の飲む安い酒」「おいしくない」「何が混ざっているか分からず危険」というイメージが定着していた。

「そこで消費者が求める安心安全や、おいしさを実現できればもっと売れるのではないかと、王立農業大学と協力して、製造技術と品質の向上に取り組む研究を実施し、見いだした改良技術を普及するために国際協力機構(JICA)の草の根技術協業事業を活用したプロジェクトを始めました」。

品質を向上させるための醸造技術を開発し、農家を対象に衛生や品質管理の研修を行った。従来の量り売りではなくボトル容器で売り出すことにした(写真右下)。販路も開拓し、今では国内で飲まれているだけでなく、カンボジア土産として空港でも販売され、酒造農家の収入増にも役立っている。大学の研究だけで終わらせるのではなく、それを社会に還元するモデルケースとなった。

### 国際協力研究には 社会科学の力が必要

グローバルな課題を解決するには、ニーズに基づいた技術開発から社会還元までが1つにつながるが必要で、そのためには自然科学だけでなく、社会科学の知識や経験が加



キャッサバ畑で生産農家の抱える問題に耳を傾ける様子(左)。キャッサバは主にアフリカ、アジア、南アメリカの多くの国で食用に栽培される。地中に巨大なサツマイモのような塊根をつくり、そのでんぷんはタピオカの原料になっている。農家の現状と課題を見いだすための世帯調査の様子(右)。

わるのが大切だと考えている。

「国際協力は、医学や工学などの応用分野を含む自然科学の研究者が見だし、先進国で用いられてきた技術を普及することが中心となっています。しかし、どんな技術や知識であっても社会に定着させるためには、支援内容を定める前に現地の人々のニーズや問題を把握することが重要で、それを可能にするのが社会科学です。ニーズを確認せずに始まる国際協力は、どんなに頑張っても技術の採用や問題の解決につながりません」。

社会科学的手法を用いた研究は、現地調査やデータ収集だけでなく、論文を1つ執筆するにも時間がかかることが多い。また特許などの目に見える成果になりにくいことから、研究者としての実績が評価されにくいのが現状だ。「論文執筆よりも、誰かの問題解決につながっていくことに、研究の意義を感じています。開発した技術が用いられた理由や、用いられなかった理由を分析することは、次につなげるための重要な研究です」と意気込む。

論文にするにはデータが足りない現地調査の結果などは報告の機会が限られるため、国際協力で活用できるデータや情報が埋もれてしまうことが多かった。農学国際教育協力研究センターが国内の農学系の大学と協力して創刊した「農学国際協力」を、そのような現地調査のデータを研究実績として積み上げる場とし、国際協力の実務と研究を結びつけるとともに、社会科学的手法を用いた研究に対する評価にもつなげていきたいと考えている。

### 貧困や不平等を 女性の視点で見つける

開発途上国が抱える問題を解決するには、研究分野、国や地域、ジェンダーなど、すべての多様性をうまく組み合わせないと、問題と解



決方法を正しく見いだしていくことができない。

多様な視点を取り入れるには、多様なバックグラウンドを持つ研究者が協働できるように、制度だけでなく、研究者の意識も変えていく必要がある。

「ダイバーシティとは、さまざまな人々がお互いを理解し、尊重することです。1つの研究分野では到底解決できない問題を、いろいろな分野が一緒になって解決しようとしています。異なる分野の知識や経験を融合させることはたいへんですが、真の課題解決には欠かせません。実験が終わればすぐに論文を書ける分野もあれば、そうでない分野もあります。それぞれの研究分野の特色の相互理解を深めることがダイバーシティの取り組みには必要で、そこから社会問題の解決に貢献できる研究になると思います」。

カンボジアでは長年の内戦で多くの男性が亡くなり、40代以上の人口構成は女性の方が多い。それでも伝統的価値観や慣習が根強く残り、「女子は家庭の重要な労働力」「女子に教育は必要ない」と、男性と同じような教育を受けられなかった。苦しみながらも、堪え忍んできた女性も多い。

「グローバルな課題というと、国単位のマクロな視点から考えがちですが、実際に貧困や不平等の影響を受けるのは女性や子供などの立場の弱い人です。真の課題解決には、そうした人々に寄り添う身近な視点が必要です。農村調査をしていると、女性同士だから話せる問題、気づける問題があることを実感させられます。一方で、現状を問題だと認識していない女性もいます。困っているという声が聞こえてこなくても、女性の視点が加わることで問題を見いだすことができます。ジェンダーサミットを、そうした意識を高めるきっかけにし、みんなで共有できる機会にしたい」と力を込めた。



高い品質と安全性を実現した米焼酎「スラータケオ(武玉)」